

בְּרֵאשִׁית II



創世記 2 章

9 節

ベレーシート
בְּרֵאשִׁית

創世記 2 章

神である【主】は、
その土地に、見るからに好ましく、
食べるのに良いすべての木を、そして、
園の中央にいのちの木を、
また善悪の知識の木を生えさせた。

(創世記 2 章 9 節)

食べるのに良いすべての木って何でしょう。



この学びは「新改訳 2017」を基本としています。

原文で味わう創世記 2 章 大切な視点

イザヤ書 34 章 16 節

【主】の書物を調べて読め。これらのもののうち、どれも失われていない。それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊がこれらを集めたからである。

主の書物を調べて読み、主の書物に尋ね求めるなら必ず伴侶を見出すとあります。 創世記だけを読んでいても、創世記は理解出来ないことばかりです。なぜなら、預言的であり奥義的なので、イエシュアが来てようやく正しく理解できるわけです。聖書は、それぞれの伴侶を通して理解できるようになっています。その伴侶が、聖霊によって私たちに与えられることで、聖書が正しく理解できるようになります。 そして、私たちが自ら尋ね求めるなら導かれるということです。

原文で味わう創世記 2 章 大切な視点

イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔か

ミツケDEM
ら^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} 告げ (同義的パラレリズム修辞法)、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる (同義的パラレリズム修辞法)』という。 (パラレリズム修辞法)

二つのパラレリズムが使われています。

前半は将来のこと、終わりのことを初めから告げている、まだなされていない、これから起こる事を昔から告げ、とあります。

歴史の始まりである創世記の学びは、歴史の終わりを学ぶことにもなり、創世記から、すでに終わりがどうなるかを理解出来るのです。まず、前回の復習から入りましょう。

創世記 2 章 8 節

ミツケDEM
神である【主】は東の方^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} のエデンに園を設け、
そこにご自分が形造った人を置かれた。

ミツケDEM
「東の方^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM}」を「昔から^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM} ^{ミツケDEM}」と解釈して、
神である【主】は、人を大地のちりから形造って、昔からある

エデンの園に置かれた、と学びました。

「園^{ガン}」は、フラワーガーデンのようなお庭ではなく、

「四方を囲まれた」という意味です。これは後に、

イスラエルの歴史に登場する「幕屋」の予告でもあります。

創世記の根底には、イスラエルの歴史が土台にありますので、ここを

基軸として見て行くことになります。ですから、

人間がどのように造られたかという話ではないのです。

神様の御計画は「四角に囲った園」に人を置かれた、すなわち、

幕屋の中に、イスラエルの民が「置かれた^{シーム}」ことが

8節では一番重要なのです。

続く9節～14節は、エデンの中にある園について記され、

15節に至っては、「神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に

置き、そこを耕させ、また守らせた。」としています。

すでに8節で「置かれた^{シーム}」とあるにもかかわらず、

15節では「連れて来て置いた」とあります。

8 節で「置かれた」、そして 15 節でも「連れて来て置いた」のです。

8 節「置かれた」、15 節「置いた」。 何のことか分かりますか？

「置かれた」

創世記 2 章～3 章に「置かれた」が 3 回出てきます。

創世記 2 章 8 節

- ・ ・ 人を置かれた ^{シーム} שִׁים  期間限定ではなく、永遠です。

創世記 3 章 15 節

- ・ ・ 神が蛇との間に敵意を置いた ^{シート} שִׂית  期間限定です。

創世記 2 章 15 節

- ・ ・ 連れて来て ^{ラーカハ} לָקַח 置いた ^{ヌーアッハ} נָתַח
- 取る・娶る (結婚用語) 安らかに導かれる
永遠の身の置き場

神は人と結婚してともに住むという意図が読み取れます。

結婚するために連れて来た、娶るために連れて来たという意味です。

「娶る」という結婚の概念は、2 章後半の重要なテーマであり、

聖書全体の重要なテーマでもあります。

ラーカハ
神がイスラエルを「娶り^{ラーカハ} לָקַח」、妻としてともに住むのです。

ヌーアツハ
15 節「置いた^{ヌーアツハ} נָתַח」は

「安息を与えて憩わせる・永遠の身の置き所」という意味です。

ヌーアツハ
永遠に自分の身を置くことが^{ヌーアツハ} נָתַחで、

これが、人をエデンの園に置かれた神の目的です。

黙示録 21 章「新しいエルサレム」が、夫のために飾られた花嫁のように整えられ、天から下りて来るという表現と一致し、

「わたしは後のことをはじめから告げ（イザヤ 46 : 10）」を証ししています。

マタイの福音書 11 章 18 節

すべて疲れた人 重荷を負っている人は わたしのところに来なさい。

ヌーアツハ
い。わたしがあなたがたを休ませてあげます^{ヌーアツハ} נָתַח

ヌーアツハ
「休ませてあげます」が^{ヌーアツハ} נָתַחで、「くびきを負う」というフレーズも

結婚の概念です。これは、黙示録 21 章と符合します。

黙示録 21 章 3-4 節

3 私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。

「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、
人々は神の民となる。

神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。

4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。

以前のものが過ぎ去ったからである。

^{メヌーハー}
מְנוּחָה 名詞「 憩い 安息 」

詩篇 23 編 1-2 篇

1 主はわたしの羊飼いです。 わたしは乏しいことはありません。

2 主は私を緑の牧場に伏させ ^{メヌーハー}
מְנוּחָה のみぎわに
伴われます。

主が私を憩わせて安息を与えるために伴われるのです。

この主との深い交わりが、私たちに安息をもたらします。

8節では「豊かな水が地から湧き上がり」とエデンの園が

贅沢極まりない、満ち足りたところと表されていましたが、

もう一つの特徴として「安息の場所」とも言えます。そこは、

シークレットプレイス。人は、神が永遠に与える安息を味わい、

その素晴らしさを楽しむのです。

本来、エデンに置かれた人の永遠の務めは「耕す」ことと

「守る」ことで、これが「王なる祭司」としての務めとなり

ます。神の傍にいて、神のことばを聞き、神のことばを悟り、

神のことばを表現する務めです。換言するならば

パーニーム・エル パーニーム
פְּנִים אֶל-פְּנִים

「顔と顔を合わせる」

主を知る永遠の至福の務めということになりますね。

では、今回のテキスト創世記2章9節に入っていきたいと思います。

ここでの一番重要な語彙が何かを考えてみてください。

創世記 2 章 9 節

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく。食べるのに良
 いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識
 の木を生えさせた。

未完了形ですが意味は完了形です。

^{ハーアターマー} ^{ミン} ^{エローヒーーム} ^{アドナイ} ^{ヴァツヤツマハ}
וַיַּצְמַח יְהוָה אֱלֹהִים מִן־הָאֲדָמָה
 生えさせた 神である主は その土地に

^{レマアホル} ^{ヴェトーヴ} ^{レマルエ} ^{ネフマード} ^{エーツ} ^{コル}
כָּל־עֵץ נְחֻמָּד לְמַרְאֵה וְטוֹב לְמַאֲכָל
 好ましい 神の目には 美味しい 食物として 見るからに 分詞 全ての木を

^{ハツガン} ^{ベトーフ} ^{ハハツイーム} ^{ヴェエーツ}
וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֶּן
 いのちの木と 園の中央にある

^{ヴァーラー} ^{トーヴ} ^{ハツダアット} ^{ヴェエーツ}
וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע
 善 知識 悪と 木

主体は神である【主】です。そして9節で一番重要なことばは

「^{ツァーマハ} **וַיַּצְמַח**」です。

「見るからに好ましい木」「食べるのに良い木」「いのちの木」

「善悪の知識の木」を生えさせました。

エーツ
今までなかった「木 עץ」を生えさせました。

そして、ここに登場する「木」は、すべて男性名詞です。

これは人が「食べるための木」です。普通の木ではありません。

私たちがイメージする tree でもありません。

この「木」は神のことばのメタファーです。

神のことばとしての「木」を地に生えさせたのです。

それは、神のことばである「木」を人間に食べさせるためです。

様々な種類の木を生えさせたということです。

ヴァツヤツマハ
וַיַּצְמַח「生えさせた」未完了形ですが、意味は完了形です。

エローヒーム アドナイ
יְהוָה אֱלֹהִים「神である【主】は」

「神である【主】は生えさせた」 どこに？

ハーアダーマー ミン
מִן־הָאֲדָמָה「その地の中のある土地から」生えさせた。

その生えさせたものが「^{エーツ} ^{コル} כָּל-עֵץ」で、

^{レマルエ} ^{ネフマード} לְמַרְאֵה נְהֻמָּד 「神の目にとっては好ましい木」です。

神の視点から見て好ましい「**すべての木**」を生えさせました。

どんな「**木**」かというと・・・

^{レマアホル} ^{ヴェトーヴ} לְמַאֲכָל וְטוֹב 「**食べるために良い木**」

^{ハッガーシ} ^{ベトーフ} הַגֶּן בְּתוֹךְ הַגֶּן 「**園の中央にある**」

^{ハハツイーム} ^{ヴェエーツ} הַיַּעֲרִים וְעֵץ הַיַּחַיִּים 「**いのちの木**」と

^{ヴァーラー} ^{トーヴ} ^{ハツダアット} ^{ヴェエーツ} וְרַע וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב 「**善悪の知識の木**」です。

^{ヴァツヤツマハ}
動詞は וַיַּצְמַח 一つです。

神の目から見て「好ましい木」もあり、「食べるのに良い木」もあり、

園の真ん中には、「いのちの木」と「善悪の知識の木」があつて、

すべて良い木です。 毒のある木はありません。


なぜなら人間に食べさせるために生えさせたのですから。


「善悪の知識の木」が後で問題になりますが、この木には毒はありません。園の中央にある「いのちの木」も「善悪を知る知識の木」も神の目にとって良いもので、人間が食べるために必要な木なのです。園の木はすべて人間が食べるために生えさせているのです。

聖書を読む前に、いつの間にか様々な教理で刷り込まれてしまうので、そのままを理解できないことがあります。

神様の目に良いものとして、園の中央のいのちの木も、善悪の知識の木も生えさせたのですから、すべて毒は入っていないのです。

たくさんの木があるようにも思えますが、根は一つです。

エーツ
神のことばが「木 」に例えられている黙示録 22 章 2 節では、御座から流れるいのちの川の両側に「いのちの木」が並んでいます。ここも複数形ではなく、単数形になっています。根が一つだからです。だからすべてが良いものなのです。

レマアホル ヴェトーヴ


「 食べるために良い木 」

神の判断ですべて「食べるのに良い木」として生えさせているのです。

しかし、女が蛇にそそのかされて「 善悪の知識の木 」だけを
食べるのに良いものとしたようです。

「 善悪の知識の木 」だけを食べれば神のようになれると思い、
それだけを取って食べたのが間違えでした。

ツァーマハ
נִמְצָא

「 生える 」

神である【主】は、エデンの園に人を招いて、人が食べる木を生えさ
せました。

ツエマハ
נִמְצָא 「(名詞) 若枝」 🖱️メシアを表しています。

「 木 (神のことば) 」は、イエシュアも表しています。

これから始まるイスラエルの歴史の中に「 ぶどうの木 」

「 いちじくの木 」 「 ざくろの木 」 「 オリーブの木 」 が

登場し、申命記には、約束の地にある木として出てきます。

タプーアツハ
雅歌では、花婿がりんごの木  (雅 2:3) にたとえられて、

その実は花嫁にとって甘い木だそうです。

神の民、イスラエルの神とのかかわりを木にたとえているわけです。

「 ぶどうの木 」 「 いちじくの木 」 「 ざくろの木 」

「 オリーブの木 」 この順番も実に深い意味が含まれています。

ここで、エデンの園にあるいろいろな木の表現を見て行きましょう。

レマルエ ネフマード
לְמַרְאֵה נְהַמָּד

「 見るからに好ましい木 」

エデンの園に生えたすべての木が、見るからに好ましいとは

いかにも**美味しそう** **נְהַמָּד** の分詞 **נְהַמָּד** が使われています。

(創3：6)

ハーマド
動詞 **נָהַמ** 「 欲しがる 望む 慕う 喜ぶ 」

ヘメド
名詞 **נְהַמָּד** 「 優美 」

これらは表面的な意味で、「見るからに」の「 見る 」は、

神の目から見る 「 神の幻：ヴィジョン 」を示しています。

アブラハムは最後の信仰の試練で、神の示すモリヤの地に行きました。モリヤの山は、後にエルサレムの地になります。そこでアブラハムは、神の御計画を見たのです。

イルエ アドナイ
יהוה יראה

「神様をご覧になる」(創 22 : 14)

「備えがある」ではなく、神がいつもご覧になるという意味です。

神のヴィジョン(御計画)をアブラハムが知って、

共有し参画する使命にアブラハムは合格したのです。

同じものを見ることが愛することだと教えられた箇所です。

神の目から見て好ましい木、これが神のヴィジョン(幻 ^{ハーゾーン} קִרְיָטִים)

という神様の御計画です。新約では「御国の福音」となります。

神の「御国の福音」を見るからに好ましい木として隠しています。

イエシュアが来て語ったのは「御国の福音」です。ですから

あらゆる奇蹟も「御国の福音」のデモンストレーションです。

しかし、イスラエルの人たちは、誰一人悟ろうとはしませんでした。

「 御国の福音 」は靈的なものなのです。

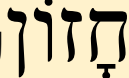
ヨハネの福音書 6 章 63 節

わたし（イエシュア）があなたがたに話してきたことばは靈であり、またいのちです。

靈が与えられていなければ、理解することも、求めることも出来ません。復活したイエシュアはもう一度「 御国の福音 」を弟子たちに語りました。弟子たちの靈を再生させて、自らが内住して語り続けて、ようやく弟子たちは理解出来たのです。それで、見るからに「好ましい木」を、弟子たちはやっとな食べる事が出来たのですが、すでに 9 節に備えられていたのです。

箴言 29 章 18 節

ハーゾーン

幻  (神の御計画) がなければ、民（神の民）は好き勝手にふるまう。👉 イエシュアが来た時のユダヤ人の姿です。

しかし、みおしえ（神様の本当のトラー）を守る者（それを知って守る者）は幸いである。

ハーザー
הָזַרְתִּי 「見る 予見する」と
ラーアー
הָאָרְזָה 「見る 知る」は同義です。

ハーゾーン
幻 הָזַרְתִּי で、神の御計画の素晴らしさと完成を見せています。

神がしようとする幻が見えなければ、民は好き勝手に振る舞い、
神のことばを自分中心に解釈して独りよがりになって食べてしまいます。

幻（ご計画）は神のみおしえであるトーラーに啓示されています。

これが、見るからに「好ましい木」の真意だと考えられます。

「見るからに好ましい木」は

園に生えさせた木、園の中央にあるいのちの木、善悪の知識の木
全部です。全部食べなければ

「見るからに好ましい木」を食べたことにならないのです。

ところが蛇は、「善悪の知識の木」だけを食べさせたのです。

ここは重要です。神の御計画の全貌を示すことばの中から、

一部だけを食べさせたのが蛇です。これは、

イエシュアが来た時、神殿ユダヤ教、律法主義が食べていたものです。

イエシュアが語ることばは霊であり、いのちである「御国の福音」

であり、神のヴィジョンです。この中にすべての木が入っているの

です。 だからイエシュアのことばに耳を傾けなければいのちを得られないのです。「 善悪の知識の木 」が問題なのではありません。 神の目に好ましい木の中から一部分だけを食べさせたことが問題なのです。 この辺りは後日、聖書の訳語の問題として取り上げます。 原文からその箇所を光をあてていくことになります。

「 いのちの木 」はイエシュアの表象ですが、

「 善悪の知識の木 」も重要です。

神殿ユダヤ教、律法主義の人たちは「 善悪の知識の木 」だけを食べて、良いか悪いかの基準に仕立てて順守していき、出来ない時は、罰則を加えたりします。

イエシュアは、神殿ユダヤ教や律法学者たちの決めた規則を守らず、断食もせず、勝手に安息日を破りました。自分たちの決めた善悪の規定から逸脱するので、阻害して殺意を抱き、殺してしまうのです。

レマアハール トーヴ
טוֹב לְמַאֲכַל
「 食べるのに良い木 」

この表現も、神のことばであり、神のヴィジョンそのものです。

人は食べた物と一体となります。「木」を食べる事で神のことが
人の内にとどまり、神とともに生きることができるのです。

良い木の「^{トーヴ}良い טוב」は、創世記 1 章の神の特愛用語です。

(4, 10, 12, 18, 21, 25, 31 節)

神は良い方であり、良いものしか与えることのできないお方です。

その方がエデンの園に「木」を生えさせたのです。

エデンの園で、人は「いのちの息」を吹き込まれただけではなく

食べるのに良いすべての木に象徴される

「神のことがばによって生きる者」とされました。

神の究極の目的は、人が神のことがばと一つになることです。

これで、同じ家に住むことができるようになるのです。

そこまで人間が造り変えられていきます。

内住される御霊と、天におられるイエシュアのとりなして、

御子のかたちに造り変えられていくのです。

ハツガーン ベトーフ

בְּתוֹךְ הַגֵּן

「園の中央にある木」

園の中央にいのちの木と、善悪を知る知識の木があります。

ベトーフ

בְּתוֹךְ



ターヴェフ

תּוֹךְ

普通名詞男単

ベ

בְּ

前置詞

「ど真ん中」

中・～で

園は「幕屋」を予表しています。その真ん中が至聖所です。

ベトーフ

創世記 1 章 6 節「水の真ん中 **בְּתוֹךְ**」で登場した語彙で、

とても重要な語彙です。幕屋の至聖所は、人の霊の部分で、

神と人がかかわる場所になります。その霊が機能不全を起こして

しまうのです。蛇のもくろみは大成功でした。

この機能不全になった霊を再生するのが神の最初のみわざです。

この再生のみわざは、復活された夕べから始められました。

シャーローム

イエシュアが来て、「**שְׁלוֹמְךָ** 平安があなたがたの中にあるように」

と息を吹きかけます。2 回も言います。

これは挨拶用語で言われたものではありません。

シャーローム

שְׁלוֹמְךָ 平安



動詞

シャーレーム

שְׁלֹמְךָ

「神様の御計画が実現する」という意

味です。「平安があなたがたにあるように」とは、
「神様の御計画があなたがたに実現するように」ということです。
そして「聖霊を受けよ」と息を吹きかけます。
その時から 40 日間「御国の福音」を語り続けるわけです。
それまでの弟子たちは「御国の福音」を理解していませんでした。
なぜなら「御国の福音」は霊的な事柄ですから、聖霊によらなければ理解できないからです。ですから、教会も聖霊によらなければ
「御国の福音」を伝えることも教えることもできません。
アシュレークラスは、「恵みの福音」とか「救いの福音」ではなく、イエシュアが伝えた「御国の福音」を理解することに徹しています。「私の救い 私の祝福 私の地境を広げて」ではなく神様の御計画: 幻(ヴィジョン)が何かを知る事に集中しています。
そして、たとえて語られる神の御計画を、関心を持って聞き、
尋ね求めていくことで、神様は答えられ、示されるのです。
これが神の知恵です。
私たちの残されたわずかな霊の残り(マラキ 2:15)に語り掛けられているのです。関心を持たなければ、永遠に閉ざされるのも

神の知恵です。

わずかなところに働きかけて、応答する者の霊がさらに機能が回復されて理解できるように、神はいつも働いているのです。それが「いのちの書」に書かれている者の務めをする者として、御計画を悟る者とされるのです。

中央に非常に重要な

「いのちの木」と「善悪の知識の木」を置かれました。

ユダヤ教のシナゴグ（集会場）では、トーラーの朗読台を会堂中央位置に置いて、人々が囲むように座るようです。

これは、荒野での宿営する形になぞらえている

トーラー中心の三部構造です。

出エジプト記 25 章 8 節

彼らにわたしのための聖所を造らせよ。

ベト-ハ-ム

そうすれば、わたしは彼らのただ中 **בְּתוֹכָם** に住む。

オーヘル

イスラエルの民が荒野で宿営する際、幕屋の天幕 **אוֹהֶל** が設営され

中心に神の語られる場所・至聖所を置きました。

幕屋を囲むように、モーセとアロンの三人の息子たちを始めとしたレビ族が宿営します。さらにその周辺に 12 部族が宿営します。

東にユダ族の陣営（両脇にイッサカルとゼブルン）、南側にルベンの陣営（両脇にシメオン ガド）、西側にエフライムの陣営（両脇にマナセ ベニヤミン）そして、北側にダンの陣営（両脇にナフタリ アシェル）が配置されています。

出発は東側のユダ族が先頭で、南側→西側→北側と続きます。

「いのちの木」がど真ん中に置かれたように、天幕を通してイスラエルの神がイスラエルのただ中に住まわれました。

モーセは毎日至聖所で神様のことばを聞いて伝えていました。

アロンは年に一度、至聖所に入ることを許されました。

ハハイーム エーツ
עץ ההימים

「いのちの木」

(11 回 : 創世記 3 回 箴言 4 回 黙示録 4 回)

ヨハネの黙示録 2 章 7 節

耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしは**いのちの木**から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。

ヨハネの福音書 22 章 2 節

都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせる**いのちの木**（沢山あるように見えますけど単数で根は一つです。）があつて、毎月一つの身を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒した。

黙示録 22 章 14 節

自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らは**いのちの木**の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。

門を通過して都に入るようになるけれども、門から出て来る人たちも同じ人たちです。

黙示録 22 章 19 節

また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、

神は、この書に書かれている**いのちの木**と聖なる都から、その者の受ける分を取り分けられる。

2章を除いて22章です。

最初の人アダムは「いのちの木」を食べたか。

神様のようにになりたいとは自然な理です。神様を表現するために人は造られていまし、最終的に救いも御子のかたちになるように設定されています。神のようになることができるように神は働かれています。ですから神様のようになるのは決して悪いことではありません。では、どこに問題があったのでしょうか。

「善悪の知識の木」の実体も知らず、またサタンが何をしたのかをよく知らないまま、私たちは罪を犯してしまった悪い者だという意識だけが入っています。

私たちは神様の言うことに聞き従わない、背信の人間だということだけが刷り込まれています。私たちは悪い者と・・・。

そのような意識を造り上げられているのです。

聖書に無い「原罪」という語彙

私たちは、神様に背こうと思って「善悪の知識の木」を食べましたか。 私は初めから神様に逆らっている者だという意識ですか。

アダムとエバは、神様に背いてやろうと思っていたのですか。

では、「原罪」とは何なのでしょう。

ここをこれから探るために、今まで教えられている教理を、

もう一度原文から検証していかなければなりません。

「いのちの木」とはメシア・イエシュアが語る「神のことば」です。

最後のアダムであるイエシュアは、人にこの「いのちの木」を食べさせるために来ました。 ということは、

最初のアダムは食べていないのです。 そして、

ある手続きをしなければ「いのちの木」を食べることは出来ないのです。 いつの時点で蛇が来たのかはまったく書かれていません。

ただ神様は、それを取って食べると死ぬよ、と警告はしたのです。

そこに蛇がいるのを神様はご存知ですから・・・。

神様はシナリオライターです。 物語の展開や、人間に与えられた

使命に対して、御使いのトップのサタンが何を思うかも想定済みです。サタンが、どのような感情を抱くかを周知の上で、
アダムに警告したのです。

ヴァラー トーヴ ハツダアット エーツ
עֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע

「 善悪の知識の木 」

この語彙は 2 章 17 節で詳しく扱います。

9 節では、神である【主】が、人が食べるのにふさわしい木として
すなわち「 神のことば 」として「 エデンの園 」の地に生えさせ
たという事実を先ず確認しておきたいと思います。 これは、
2 章を理解する上で重要な内容です。

箴言では、神を知る知識の大切さを教えています。

その知識は、あくまでも神のいのちと一緒に食べて支えられる必要
があります。 神のいのちのない知恵と知識は、何の意味もありません。
箴言で語られるのは、神のいのちに支えられる神の知恵と知識
です。 それがなければ獣に等しいのです。

「 善悪の知識の木 」は、あたかも毒を含んでいるかのように思っている人がそれは違います。

「 善と悪 」は、神の知識の全貌を示すメリズマ修辞法です。

たとえばダンからベエルシェバまで、北から南まで、というように、

「 善と悪 」とは、「 善悪の知識の全体 」を指しています。

この「 善と悪の知識 」が一人歩きをして、人が善悪を判断して扱うようになったというのが問題なのです。 だから

「 善悪の知識の木 」だけを取って食べると死ぬ、というのが神の言われる本当の意味です。毒があったわけではありません。

原文と訳語の違い

原文では「それだけを取り出して」とあるのですが、

そのように聖書は訳されていません。原文にあるのに訳されていないのです。 これは、次回の次に学びたいと思います。

今日のまとめ

園の中に生えさせた「 木 」について学んできました。

「木^{エーツ}」は神のことばのメタファーであり、

神とイスラエルの関わりを表す象徴でもあり、

イエシュアご自身を指し示してもいます。

園の中央にある二つの木「いのちの木」と「善悪の知識の木」

も本来は人が食べる木として、神である【主】が生えさせたものです。

ここを心に留めたいと思います。

一箇所だけ、神のみこころを補足したいと思います。

モーセはイスラエルの民に 40 年間、神様のことばを教えていきま

すが、最後の訣別説教でこう語ります。

申命記 8 章 2-3 節

2 あなたの神、【主】がこの四十年の間、荒野であなただを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それはあなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

3 それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それ

は、人はパンだけで生きるのではなく、人は【主】の御口から出るすべてのことばで生きるということを、あなたに分からせるためであった。

人は【主】の口から出るすべてのことばで生きる、つまりエデンの園に生えさせたすべての木を食べて生きることが神のみこころだったのです。イスラエルはそのことに失敗しました。

それでイエシュアが来て踏み直すのです。

40日40夜、荒野に行って断食をして、神のすべてのことばで武装しました。ですからサタンの誘惑さえも敵わないのです。

そしてイエシュアも「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」と同じこのことばを言いました。

(マタイ4:4) 最初のアダムを終わらせて、踏み直してくださるのです。イエシュアによって、私たちの霊が回復され、そしてたましいを造り変えられ、からだも新しくされるとは、神のすべてのことばによって生きることが完成するということです。こうして、初めて永遠に神様の民となることができます。

その完成が、携拳です。 教会は、携拳を境に完全な者になります。
ですから教会は、神の幻を見据えて語らなければ、的外れになるの
です。

箴言 29 章 18 節

幻がなければ、民は好き勝手にふるまう。
しかし、みおしえを守る者は幸いである。

幻（神の御計画）がなければ、わきまのない者になり、
自分中心になっていきます。
非常にデリケートな問題でもあり、原文を味わう重要な部分です。

ミツケテム
前回の **מִן־מִזְרָח** が「東の方」ではなく、

「昔からある」と解釈できると原文から受け取りました。

このように、原文の語彙を解釈すると、納得できますし、
話がすべてつながってきます。

実は、訳されるべき語彙が訳されていないことが問題なのです。

不思議です。 ここを理解できないと、

イエシュアが来た時の神殿ユダヤ教や律法主義が理解できないのです。

だから理解できないまま

イエシュアが来たという話を聞いているのです。

神のことばによって励まされて、今の私たちを生きてはいますが、

神の幻（ご計画）がわかっていないのです。

幻は霊的なので、みんながみんな分かるものでもありません。

クリスチャンなら分かるという話でもないのです。

関心を持つ人にしかわからないのです。

誰が気づくのかは、私たちにも分かりません。

三年間、聞いていた弟子たちもわからなかったのです。

ですから復活後 40 日間イエシュアは地上にとどまって

もう一度やり直しをしたのです。

だから 40 日間の顕現は非常に重要なのです。

弟子たちが初めて福音を悟るのに 40 日もかかったのですよ。

そして昇天した後、120 人が祈っているでしょ。

どうして 120 人なのですか。 何の祈りをしているのですか。

この祈りは皆さんが祈禱会で祈っている祈りではないですよ。

冠詞付のあの祈り

「 主の祈り 」の本当の意味を知って祈っているのです。

10 日後に、聖霊が注がれて神殿ユダヤ教に対抗できる力と

イエシュアの御名によって与えられた権威によって

証しすることができるわけです。 それまでは恐れていたのですよ。

部屋に籠って、鍵をかけて・・・。

そこにイエシュアが、すーっと入って来たわけでしょ。

だから 40 日間の顕現って物凄く重要なんだけど、

教会は全く扱いませんね。

40 日間で何が必要だったのかを語られているのですよ。

それをペンテコステとして教理で教えてしまうので、

教理で聖書を読んでいくのですね。 このように

私たちは教会で慣らされているのです。

「 原罪 」がそうです。

何が問題だったのかを読み解くのではなくて

最初から「 原罪 」を教えられて、

私たちは神に背く者なのだ！！と頭にこびりついているのです。

だから、「善悪の知識の木」には毒があって、毒を食べてしまったのだというレベルで読んでしまうのですね。だからそれ以上進まないのです。ここを外す必要があります。

一旦、体制が出来上がると、

なかなか、新しいことが受け入れ難いようです。

新しい改革を嫌うので、改革的なリーダーが出て来ると

困っちゃうわけです。いつもの決まったパターンが楽ですから・・・。

教会も公務員化されてきて

それを崩すような人が出て来ると困るのでしょうね。

